

内陸地震の長期評価の高度化に関する 調査観測計画部会での有識者からの主なコメント

(総論)

- 活断層の長期評価ではなく「内陸で起きる地震の評価」であり、これまでと発想が違ふ。活断層のみではなく、その他の地球物理学的なデータ、歴史地震学的なデータ、地質学的、地形学的なデータを全て合わせて、内陸で起きる地震の長期評価を行う方向に進むことが重要。
- 一つのプロダクトのみが世の中に出ていくのではなく、専門家向けに、ある程度のクオリティコントロールされた中間生成物も活用できるよう、専門家と対話しながら、最終的にはエンドユーザーに分かりやすく伝えられる仕組みをつくっていくことを視野に入れるべき。
- 情報を統合して、一般向けのプロダクトとして仕立てるのはかなりハードルが高いが、その前段階として、難しい部分もありながらも、ある程度専門的なことが分かっている防災等の専門家向けに示していく方がやりやすいのではないかと。

(周知・広報について)

- 国民の生命、安全確保の観点で、中規模でも被害をもたらす地震であっても被害が発生することについて広報が大切。さらに、M5やM6クラスがどの程度の頻度や空間分布で発生するのか、どのような発生状況になっているのかといったサイエンスのバックグラウンドが欲しい。
- M6や7の地震でも、百年に1度、数十年に1度でも発生する可能性があることを周知できれば、地元の自治体や個人でも耐震対策の意識がさらに変わると考える。

(既存の評価との関連性について)

- 現在、地域評価を行っているが、今後、長期評価との位置付けをどう考えるか、まだ行っていない地域とどう折り合いをつけていくのか、そのところを含めて検討していくことが必要。
- 地域評価について、活断層を基にした評価と、主に地震活動を基にした評価の2種類が出てきており分かりにくい。これらの整理を含めて、今後、統合的に整理されると良い。

(地震データについて)

- 強震動のデータは、専門家向けにほぼ生データの形で出ているが、もう少し専門家が使いやすいような形で出せないか。
- 既存の地震活動モデルをブラッシュアップし、地震本部のお墨付きとして示すことで、その後の強震動予測モデルにも上手くつながっていくのではないか。

(歴史地震データについて)

- 現在の地震データと過去の地震データにおいて、データが新しい順に、被害記録、歴史地震のカタログ、考古学的な調査データとなっている。そこから、変動地形学的な地形データ、さらに地学的データと、時間軸を伸ばしていくことが本質的な話になる。
- 内陸では固有地震という大きな地震が発生するという仮説があった。ただ、固有地震のデータを一生懸命集めても、そのデータと計器による地震活動のカタログが存在する時期の間を埋める資料が決定的に不足している。内陸の地震発生の研究も、プレート境界の地震発生の研究も、いずれも明治から少なくとも江戸時代、できればもう少し昔の歴史資料に基づいた研究を進めてほしい。

(活断層データについて)

- 活断層調査について、活断層であることは分かるが、その履歴が分からないものに対して、履歴が分からなくとも切迫しているのか否か等が分かればと良い。

(測地データについて)

- GNSSを使ったひずみレートを用いた予測に踏み出すことは非常に重要。内陸の地震の発生予測については、固有地震的な発想から少し踏み出した方がいい。

※以下の部会の議事録から抜粋・一部改変した。

- ・ 第87回 調査観測計画部会 令和5年1月31日(火)
- ・ 第88回 調査観測計画部会 令和5年7月4日(火)